

2016年2月13日

第101回山口西田読書会（2016年2月13日）

第99回（同年1月23日）のプロトコル

参加者：1 佐野、2 岡田、3 田中、4 谷、5 橋本、6 深野、7 藤村（恵）、8 山口、9 岡部（合計9人。  
順不同、敬称略）

報告：岡部昌平

## I プロトコルの確認

若干の修正があり、次の哲学的問いに入った。

1) 哲学的問い（2015年1月23日）

A 宗教は宇宙の根本と一体になることを目指すのか、一体になれない自己を知ることか

[発言 Y] 生きている間は涅槃にはならない。

[発言 T] 判断があつて没頭するのだが、没頭すると見失うので、ほどほどがよいのではないか。

[僧侶 F] 修行中の弟子に悩みはないかと声をかけたら「志のないことが悩み」だと答えた。また別の弟子は「悟りをひらきたいとは思わず、袈裟だけもらえればよい」と答えた。必死になっているところからすぼんと抜けるのがよくて。偏りすぎはよくない。

B 純粹経験の立場からいえば、宗教を意識的に考たり、行為することそのものが、宗教を否定することにならないか

[発言 Y] 気付きの原動力として純粹経験の意識の志向性をとらえれば矛盾はないのではないか。

[教授 S] こうするとこうなる、ではない。人があり、神があり、その関係を宗教として論じるのではなく宗教的要求のなかに開かれたものが宗教であると西田は考えている。

[関連するテキスト]

4-1-3 主意説の心理学者のいう様に、意志は精神の根本的作用であつて、(中略)しかるに我々は個人的欲求を中心として凡てを統一することができるであろうか。(中略) 個人的生命は必ず外は世界と衝突し内は自ら矛盾に陥らねばならぬ。ここにおいて我々は更に大なる統一を求めねばならぬようになる。(中略) 宗教的要求はかかる要求の極点である。(後略)

4-1-5 かくして宗教的要求は人心の最深最大なる要求である。(中略) 我々の要求は宗教的要求より分化したもので、またその発展の結果これに帰着するといつてよい。(後略)

## II テキスト（『善の研究』3編2章1-3段落 [3-2-1]）

第1章「行為 上」で心理学によって大なる意志を考え、統一の極致が意志であるとの結論が得られた。「行為 下」ではその統一力がどこから来たかを問題にしている。

物質の他に実在なしという科学者の見地からは、身体（有機体）の目的が意志の目的であり、それは生活欲ということになるが、生活欲からすべてを説明するのは困難であり意志の目的は、それ自身の発達にあるとする西田の立場を確認した。

また、有機体の合目的な運動が物質より起こるとする考えには、合目的力が潜勢的に物質にあるという考えと、自然現象がすべて偶然に起こるとする考えがあり、西田がこれらを同一と考えていることを確認した。知識の進歩が無限であることを信じながらも、西田が分析より総合(※)を重んじていることを確認した。(※は術語)

## III 哲学的問い

宗教的要求より矛盾なく分化（4-1-5）した個別の欲求において、統一力を有する意志が行為のもとにあるとき（3-2-1）、一意志は一行為に対応する（一意志一行為）か。